

ではじめての初段しよだんの位をうけました。

若い嘉納治五郎かのうじごろうは、弟子たちと共にいろいろと研究し、くふうしながら、新しい技わざをあみ出していきました。

「四郎、来い。」

新しい技を考え出すと、夜でも四郎は嘉納によび出されます。

「いま、こんな技を考えたのだが、やってみよう。」

二人は、夜の道場で、はげしくぶつかりあいながら、新しい技を研究していききました。こうして、浮き腰うつきこし、払い腰はらいこしなどの投げ技わざがうまれてきました。

四郎の柔道は、嘉納の見こみどおり、もともと天才的な素質があったところに、はげしいけいこをつみ重ねていくうちに、どんどん上達していきました。

二十歳になると、四郎は、三段をとばして四段の位をさずけられました。そのころは、それ以上の人はいなかったのです。最高の段位をうけたのです。